

# タクシラ訪問記

末 永 眞 海

昨昭和九年二月五日當時研學の爲め滞在中の印度五河地方の中心地ラホールを出發、西北方タクシラを訪ふた。タクシラはラホールより二百哩、汽車で約九時間程である。普通サライカラと呼ばれ近頃タクシラと呼ばれるのが下車驛である。停車場に最も近くビルマウンドと呼ばれる丘陵がある。是が最古のタクシラ廢趾で凡そ西紀前二、三千年より紀元前百八十年迄の町と云はれるが未だ充分發掘せられてゐない。更に西方一哩餘を距ててダルマラージカ塔(又はチルトープ)がある。小山の上に位置するからその手前で馬車を降り馬車は次のシルカプの北門に廻しておく必要がある。このダルマラージカ塔では中央に大塔(サーンチの大塔に類似した形)があるが甚しく毀損してゐる。大塔の周圍には多くの祠堂小塔精舎趾がある。大塔の西方小祠堂(發掘番號G5)の中よりは佛舍利が發見せられた。この佛舍利に就いては後に述べることとして次に徒歩で丘を降つて西北方一哩餘の拘浪拏塔クナナラに至る。この塔は阿育王の王子でタクシラの總督であつたクナナラ王子の塔である。この塔に接續する北方半哩に及ぶ廢都はシルカプである。この地は發掘大に進

みその結果に依ると最下層にはバクトリアが五河地方までも領した時代の市街埋り希臘の神像等が發掘せられた。その上に重なつてシヤカ時代の市街埋り更には印度パルチア並に早期貴霜王朝時代の都市が重なり存する。乃ち次に埋没してはその上に新しい都市が建設せられたものである。このシルカプより西北約半哩ジャンディアルにはベルシヤの拜火教寺院の跡がある。この拜火教はシヤカ並に印度パルチア時代にはタクシラに於て可なり榮えた如くである。このジャンディアルの東北約半哩にはシルスクがある。是は廢都でこのシルスクは是と上述のビルマウド、シルカプのタクシラ三都市中、最も新しく迦膩色迦王に依つて建設せられたらしく玄奘の見たタクシラもこのシルスクであるらしい。即ちタクシラ詳しくはタクシヤシラ（希臘人のタクシラは巴利のタツカシラより得たものとカンニンハムは云ふ）は次々に新しく建設せられた町にその名を遷せるものである。即ちペルシヤのダリウス一世や亞歷山大王又阿育王頃のタクシラはビルマウンドの地であり、彌綸陀王頃のタクシラはシルカプであり迦膩色迦王頃はシルスクである。迦王頃は首都布路沙布邏（現ベシヤブル）に次いで重要な都であつた。シルスクより東南約一哩の山間にモラーモラードウの大塔及精舎趾がある。更に茲より東北方徒歩廿分位にして小山の上にジャウリアンの精舎並に佛塔趾がある。以上がタクシラの大略の地勢である。尙停車場の近くに發掘物を陳列する立派な博物館があつてその豊富な陳列品には目を愕かす。出土の古金貨はラホール博物館では特別の許可の下に役人立合の上で見せるがタクシラでは一般陳列品と共に列べてあつて自由に見る事が出来る。

次にダルマラージカ塔附屬小祠堂（發掘番號G5）出土佛舍利壺に就いては時間に餘裕なく之を見ることを得なかつた

のは遺憾であつた。今後の旅行者に依つて特別の許可を得て寫眞に撮影し將來せられ度いものである。茲には Archaeological Survey of India 1912-13 Excavation at Taxila by John marshall 並に J.R.A.S. oct. 1914 pp973-86 等に依つて概略を述べたい。この佛舍利は今セイロンのカンデイ寺院並にサールナート(舊鹿野苑)に於ける大菩提會建立のムーラガンダクテイー寺の大塔に奉安せられてゐる。扱ジョン、マーシヤル氏は一九一三年(5)祠堂土臺下六呎の處に舍利奉安室を發見した。その室中には中央石棺があり是を圍んで室の四隅には一本宛計四本の燈明臺があつた。尙この外シヤカ王 manes 並に Azos 一世の貨幣四箇があつた。更に石棺の中には銀製の箱とその外に金のピン、ルビー、ザクロ石、紫水晶等あり、更に重要なものは記銘ある渦卷形銀があつた。更に上述の銀製の箱の中には金の壺があつた。金の壺の中には幾箇かの舍利粒とルビー、珊瑚等が存した。この舍利が佛舍利と推定せられるものである。扱渦卷形銀上の記銘は文字は驢唇文字 (Kharosthi) で言語は一種のブラークリットである。今マーシヤル氏のローマ字に直したものとその譯文に梵語を推定したものを添へて掲げると

sa	1	100	20	10	4	2	ayasa	asidasa
sahvatsare	100	30	6	ayasya	asādhasya			
in the year	136	of Azos	of Ashadha					
masasa divasa	10	4	1	isa	divasa	pradistavita	bhagavato	

māsasya	divase	15	etasmim	divase	prasthāpitah	bhagava	ah
of month	on the day	15th	on this day	were enshrined	of the Holy One	(Buddha)	
dhātuo	urasakona	lotaphria		putrana	balhalena	noachao	
dhātavah	:	:		putrena	:	:	
relics	by urasakes(?)	of Lotaphria		by son	a man of Balkh	of Noacha	
nagare	vastavva	tera		ime	Pradistavita	Bhagavato	
:	ṅṣiteva	:		:	Prasthāpitah	:	
at the town	resident	by him		those	were enshrined	of the Holy One	
dhatuo	dhamaraie			taclasiē	tannvao		
dhātavah	Dharmarājike			Takṣasile			
relics	at the Dharmarājikastūpa			at Taxila	in the district	of Tannva	

bodhisatva	śālemi maharajasa	rajatirajasa	devaputrasya
badhisattva	grhe mal'arājīnah	rājatījīnah	devaputrasya
in the Bodhisatva	chapel of great king	of king of kings	divine (of son of deity)
khuṣānasa	arogadacchinna	sarvabuddha	pyae
Kuśānasya	āogyadalakṣināya	sarvabuddhānām	pūjāyai
of Kushana	for the bestowal of health	of all Buddhas	for the veneration
prachagabudhana	pyae	ara'a(a)na	pyae
pratyekabuddhānām	pūjāyai	a bhān	pūjāyai
of individual Buddhas	for the veneration	of Arla's	for the veneration of all sentient beings
pyae	ma'apitu	pyae	pyae
pūjāyai	matāpitrōh	mitra	macha
for the Veneration of(his)parents	for the veneration of(his)friends	:	mantrin
			jñāti
			of advisers
			of kinsmen

salohi(ta)na	Puṣṣa	atmans	aroga	dajhnao	nianao
sa-Johitānān	Pujā, ai	ātmānah	ārogya	dakṣiṇā, a	?
of bloodrelatives	for the veneration	upon himself	of health	for the bestowal	
hotna	de	samaparichago			
bhavatu	?	samaparitya, ah			
be	::	the right gift			

以上のトランスクリプション並に判讀は J.R.A.S. 1914 に依つて見るもマーシャル氏自身に於ても變更せる跡が窺はれるし又諸學者の異論も無いとしないから完璧のものとは云へないし其後に於いても恐らく變更があるであらうが、今一應上掲の判讀に従つて是を譯すると、「アゼス紀元 (E.J. Rapson に従へばアゼス一世はシヤカ王朝に於て maucs に繼承しヴクラマ紀元として知らるるものは彼の即位年 58 B.C. を起點とすと) の一三六年頃沙茶月(五月中旬より六月中旬に相當)の十五日世尊の舍利はバクトリア人にしてノアチャ町の住人且つロータプリアの子なるウラサケスによりて奉安せられたり。彼によりてこの世尊の舍利はタクシラ(郊外)タヌヴ地方のダルマラージカ塔に於ける菩薩堂に奉安せられたり。(そは)大王にして諸王の王、神の子たる貴霜王に健勝の惠あらん爲と諸佛への恭敬、辟支佛への恭敬、阿羅漢への恭敬、一切衆生への恭敬、兩親への恭敬、友人、忠言者、縁戚、親戚への恭敬、自身への健勝の惠あらんためなり。

この正しき施は……なれ。」*Arana* を *Azas* と見たのはこの王の貨幣に希臘文字と臘唇文字との兩方で記せる文あり。臘唇文字では *Ayasa* 希臘文字では *Azou* と記せるその *Ayasa* と同一人と見たのである。 *Pradisavava* はサールナート出土碑文によく見る *Pradisapito* に相當するものであらう。この銘文に顯はれる貴霜王とは誰人であらうか、ラプソン教授に従へば *Vina Kadphises* (閻膏珍) を指すものとし又アゼス王を以てヴクラマ紀元の起點にして西紀前五八年とし従つて閻膏珍王は碑文の百卅六年より五八年を差引いた西紀七八年頃とし然もこの年を以てこの王の最後年とし又迦膩色迦土はこの閻王に直接繼ぐ王として従て迦王の治世は西紀七八年頃を以て始まるとなす。この事は普通迦王の治世が西紀二世紀の半ば又は後半より始まると見るものと逕庭を生ずる。 *Urasakes* とは如何なる人であつたか或はタクシラに招聘せられたバクトリヤの工人ではなからうか。 *dhagavat* は普通佛陀を指すから法顯傳、西城記共にタクシラに於ける佛舍利塔の事を云はないけれ共迦王前に已に他處の佛舍利塔を開塔遷祠した事がわかる。サールナート出土記銘には迦王の三年等と云ふのにこのタクシラ記銘には前代の王朝の紀元を云ふのは大月氏の貴霜王朝が未だ草創の頃で他の文化を取り入るるに忙がしかつた事を物語るものではなからうか。 *bahatiena* を「バクトリア人」と見たのは希臘語で *Bactria* 又は *Bactriana* は最も古いダリウス王の楔形碑文に *Bakhi* とあり降てゼンドアヴェスタに *Bakhti* 更に降てペーレヴィイには *sh* が *i* に換はつて *Bakhi* 又は *Bakhi* となり是が更に新しく回教徒によつて *Bakhi* と呼ばれるに至つた (H. G. Rawlinson, *Bactria*)。マーシャル氏は *Lahiti* を *Bakhi* と見たのである。 以上